

思い出コミュニケーションのための電子ミニアルバムの提案

山下 清美^{*1} 野島 久雄^{*2}

Portable personal memory for communication

Kiyomi Yamashita^{*1} and Hisao Nojima^{*2}

Abstract – In our daily lives, our conversations are often facilitated by referring to personal memories about important things we had, persons we met and past events. Those memories are sometimes retrieved when we are watching personal photos. We focused on the role of such personal memories and named such communication as “memoir based communication”. We interviewed seven university students and asked how they kept and carried the photos, and why they were important to them. Based on the findings from the interviews, we designed a small portable photo editor/viewer called “Portable Personal Memory”, and incorporated features into PPM that were necessary to make it really usable for memoir based communication.

Keywords: personal memory, memoir based communication, interview, photos, portable personal memory

1. はじめに

人々は日常生活の中で、さまざまな物と関わり、さまざまな人と知り合い、さまざまなイベントを体験する。そうした物や人との関係、イベントの記録は、忘却されるものもあるが、個々人の記憶の中に定着し、他者と共有されることもある。こうした個人的な歴史の重要性は、近年さまざまな側面から指摘されている。例えば、自分が生きてきた軌跡を家族や親戚を含むさまざまな人に知ってもらうために自分史を執筆したり^[1]、家族の近況を親戚や友人に伝えるために家族新聞を発行したり、日々の出来事や思索を Web 上の日記に書いたりすることが活発に行われている。また、カウンセリングや社会的コミュニケーションの分野においても、危機を乗り越えるための「物語（ナラティブ）」を生成し、それを他者と共有することの重要性が指摘されている^[2]。

われわれは、これらの個人的な領域における過去の記憶、すなわち「思い出」が、過去の完結した出来事の記述にすぎず、現在あるいは未来の自分と無関係なものだとは考えていない。思い出は、自己の過去との継続性を保証し、家族や友人とのつながりの根拠となるものである。そうした思い出を折にふれて取り出し、人に提示することが、人々にとっての新たな価値を創造することであり、また、他者との間の新しいコミュニケーションチャンネルを開くきっかけになるものになると考えている。われわれはこれを「思い出コミュニケーション」と名付け、そのコミュニケーションを活性化するための、携帯

できる情報機器のデザインを行っている。

2. 思い出工学の提案

2.1 思い出とは

本論文において、「思い出」とは、一般的に個人に関わる情報であり、個人が保存・分類・検索の責任を負うものであるとする。すなわち、新聞や本などで公開され、誰からでも検索可能になるような情報ではなく、ホームビデオ、子供の写真、旅行の記録、日記などの個人的な情報である。それらの情報には、自分史や家族新聞のように、出版されたりある程度公開されたりするものもあるが、多くは、その当事者が保存の努力をしない限り散逸してしまうような情報群である。

2.2 思い出工学の可能性

人にとって思い出が重要であるという指摘は新しいものではない。それにもかかわらず、ここで思い出の重要性をあえて指摘し、さらに「思い出工学」として提案するのは理由がある。現在入手可能になってきたさまざまな技術（十分な量の記憶デバイス、コンピュータの処理スピード、情報を共有するためのネットワーク）が思い出を保存するための十分な能力を持つようになり、また人々が日々蓄積するデータ（すなわち思い出）が、最初からデジタル化している（デジカメの写真、デジタルビデオ、ワープロによる文書など）など、思い出を維持管理するための技術的な基盤は整ってきたと考えられるからである。それに関わらず、人にとって十分に使いやすい思い出の処理システムがどのような特徴を持つべきかなどについての検討は十分に進められているとはいえない。

本論文でわれわれは、人々が大切にしている写真を手がかりにして、私たちが思い出をどのように取り扱っているかを明らかにするとともに、そこから得られた知見に基づいて、思い出コミュニケーションを活性化させる

*1: 専修大学 ネットワーク情報学部

*2: 日本電信電話株式会社 生活環境研究所

*1: Senshu University, School of Information and Network

*2: NTT Lifestyle and Environmental Technology Laboratories

本研究は、第一著者の山下が NTT 生活環境研究所に専修大学国内研究員として滞在しているときに行ったものである。

ための電子ミニアルバムシステムの提案を行いたい。

3. インタビュー調査

3.1 目的

写真は、自分自身の記憶をたどる手がかりになると同時に、友人や家族との体験を共有するためにも重要な役割を果たしている。多くの人々が、個人や家族で写真を撮影し、それをアルバムなどに保管している。従来のカメラに加えて、デジタルカメラやビデオなど、写真のメディアも広がっている。しかし、個々人が具体的に、どのような写真を撮影しているか、また撮った写真をどのように保存、利用しているか、どんな写真を大切にしているか、そして写真というものについてどのような考え方を持っているかなどは、プライバシーに関わる領域に重なることもあって、個人の経験の範囲内でしかわからないというのが実情である。そこで本研究では、日常生活で写真がどのように利用されているかを、インタビューによって探ることを目的とする。少数事例でも、写真の利用のしかたや写真に対する考え方、また写真とコミュニケーションとの関係について、ある程度詳しく探っていくことで、写真が個々人の生活において果たしている役割を明らかにすることができると考えるからである。また、そこから、主にデジタル画像による写真の活用に役立つツールの開発のためのヒントを得たいと考えた。

3.2 方法

3.2.1 被調査者

首都圏の私立大学の 1,2 年生、7 名(女子:5 名、男子:2 名)。大学の授業で協力を呼びかけて、自発的に希望してきた学生を対象とした。調査協力に対し、謝礼を支払

った。インタビューを実施した期間は、2001 年 6 月 14 日から 29 日まで。

3.2.2 手順

被調査者にはあらかじめ、インタビューの大まかな目的を説明しておき、大切にしている写真を 5 枚以上持参してもらうように依頼しておいた。各被調査者に対し、インタビュアー 1 名、補助 1 名の研究者 2 名でインタビューを実施した。インタビュアーと補助者は、1 回のインタビュー中は固定としたが、インタビューごとに適宜交代をした。

最初にインタビューの主旨を説明したあと、インタビューの模様をビデオ撮影する許可を得て、デジタルビデオ(主としてテーブル上に提示される写真を写すため)を撮影した。また、音声記録のバックアップ用に、MD による録音も行った。インタビューの長さは、被調査者が持参した写真の枚数によって差があり、概ね 1 時間半から 2 時間半であった。

3.2.2 質問内容

インタビューの基本的な流れは以下の通りである。ただし、被調査者の回答に応じて、かなり自由に補足質問を加えて、被調査者の写真やコミュニケーションに対する考え方を掘り下げて聞くようにした。

- 1) 持参した写真について(枚数が多い場合は、5 枚程度にしぼる)、1 枚ずつどのような写真かを、最初は被調査者のペースで、次にインタビュアーの質問もまじえて説明してもらう(「いつ頃の何を写した写真か」「その写真が大切なのはなぜか」「その写真にまつわる思い出など」)
- 2) 1)の写真の他にも持参した写真がある場合、それら

表 1 各被調査者の、大切な写真の概要と、写真の保存の特徴

被調査者	項目	内容
#1F	持参した枚数	5枚
	撮影時期、対象	幼児期から現在 自分、友人
	特徴	ふだんミニアルバムに入れて写真10枚程度を持ち歩く
#2F	持参した枚数	ミニアルバム3冊(ここから5枚選択)
	撮影時期、対象	幼児期から現在 自分、家族、友人、集合写真、その他の人物
	特徴	以前はミニアルバムに入れて持ち歩いたが現在はしていない
#3M	持参した枚数	小アルバム 1冊とばらの写真、合計約60枚(ここから6枚選択)
	撮影時期、対象	小学生から高校生 自分、友人、集合写真、その他(黒板)
	特徴	小アルバムは、高校入学頃、それまで撮った中から自分の好きな写真を整理したもの
#4F	持参した枚数	8枚
	撮影時期、対象	高校生から現在、子供の頃 自分、先生、友人、家族
	特徴	自室のコレクションに数枚をクリップ、ミニアルバムに入れて持ち歩く、旅行の思い出のノート
#5F	持参した枚数	手帳見開き2枚分(約16枚)
	撮影時期、対象	中学生から現在 自分、友人、家族、集合写真
	特徴	手帳の見開きに、カラーコピーした写真を貼り付けてある
#6M	持参した枚数	12枚(ここから5枚選択)
	撮影時期、対象	高校生から現在 自分、友人、集合写真
	特徴	自室の勉強機の透明板の下に、気に入った写真や新しい写真を入れている
#7F	持参した枚数	ミニアルバム1冊10枚(ここから5枚選択)
	撮影時期、対象	小学生から現在 飼っている犬3匹(1枚だけ家族も)
	特徴	ミニアルバムに犬の写真を入れて持ち歩いている

についてもざっと 1)と同じように説明してもらう

- 3) 写真一般について：写真を撮るカメラの種類や量、家族で撮る写真の種類や量、保管方法など
- 4) 写真を使ったコミュニケーションについて：ふだん写真を持ち歩くか、友達と写真を話題にすることはあるか、家族で写真を話題にすることはあるか
- 5) コミュニケーション一般について：家族とのコミュニケーション、友達とのコミュニケーション、ネット上などの未知の人とのコミュニケーションに対する考え方
- 6) 携帯電話や電子メールの使用について

3.3 結果と考察

3.3.1 大切な写真

各被調査者が持参した写真の枚数と概要、保管やコミュニケーションに関する特徴を、表 1 にまとめた。

大切な写真の対象は(#7 を除いて) 自分自身のほか、友人、家族、先生など人物を対象とした写真がほとんどであった。2,3 名の少人数が写る写真もあるが、クラスやグループのメンバー全員が写る集合写真も多く含まれていた。また写真が大切である理由としては、写っている人物との人間関係が重要である、あるいは、そのときのイベントが重要である、などが挙げられた。インタビューの中で被験者が挙げた写真が大切な理由には、親友や先生との関係や、イベントの感動など、1 枚の写真の表面だけからではわからない、背景にあるさまざまな思い出や意味合いが含まれている。写真が大切なものとして選ばれる理由は、画像そのものにあるのではなく、そこに関連して引き出される「語り」を含めて考えることが重要であると言える。

3.3.2 写真とコミュニケーション

女性の被調査者は、高校時代から現在にかけて、なんらかの形で写真を日常的に持ち歩いたことのある人ばかりであった。その場合、写真は、自分で見て楽しむだけでなく、友達との会話が途切れたときの話題づくりに積極的に利用したり、偶然友達の目に触れて興味を持たれると説明したりするなど、コミュニケーションの道具として役立っていることがわかった。具体的に以下のような実例をインタビューから挙げることができる。

- ・ #1 友達とおしゃべりしていて間があいたときなどに、子供時代の自分の写真を入れたミニアルバムを出して見せることがある。
- ・ #7 家族で飼っている犬の写真をミニアルバムに入れて持っており、友達に見せている。
- ・ #5 予定を書き込んだりする際に手帳を開くと、自然と友達の目に触れて、写真を見せて欲しいと言われることがある。
- ・ #4 話をしている相手が直接知らない友人の話題が出た場合など、手元に写真を持っていたり見せると、イメージを共有できるので話がしやすくなる。

このように、写真は、家のアルバムに保存しておくもの、というよりは、気に入ったものを常時携帯して、友人とのコミュニケーションの道具として気軽に利用できるという利便性を持っている。

3.3.3 なぜ通常の写真が好まれるのか

今回のインタビューでは、持参する写真は、通常のプリントされた写真だけでなく、デジタルカメラなどの電子的なものでもよい、としたのだが、実際にはすべての被調査者がプリントされた写真を持参した。通常の写真が扱いやすい理由のひとつは、使い捨てカメラの普及にあると考えられる。被調査者の多くが、日常的に使い捨てカメラを携帯していて、ちょっとしたイベントなどで気軽に写真を撮っていた。高校生の頃は、特にイベントがなくても、日常的に友人と写真を撮り合っていた、という人もいた。ここから、写真の画質の良さにはあまりこだわりがなく、むしろ気軽に安価であることが重要になっている。

また、通常の写真が好まれる最大の理由は、プリントしておけば、常に見られる状態で保存できる点にあると考えられる。インタビューでは、デジタルカメラやビデオについても聞いたが、家庭で所有している人が少なくないにもかかわらず、日常的にはまったく見ていなかった。電子的な画像は、コンパクトに保存できるが、見るためには装置や準備が必要になるため、実際にはなかなか活用されない。

通常の写真を保存する場合、#5 (図 1) や #4 (図 2) のように、加工しやすいことも、便利である理由のひとつであろう。

#5 は、写真そのものではなく、カラーコピーをして、さらにそれらを適度な大きさと形に切って、手帳の見



図 1 被調査者 #5 の手帳見開きの写真

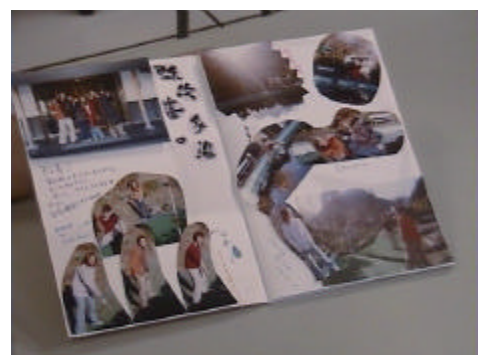


図 2 被調査者 #4 のノートの写真

開きページに配置し貼り付けていた。この方法により、写真の厚みを気にすることなく、好きな写真を自由に組み合わせることができる。さらに、手帳には、入場券、切手、プリクラ、シールなどを上から貼っていくことで、1 年間の思い出がさらに追加される。

#4 は、友人とのグループ旅行のノートを作成しているが、写真を自由に切ったり、重ねて貼り付けたりして、配置や構成を自由に設定している。また、ノートの余白部分や、写真自体にコメントを書き加えることで、旅行中のエピソードやハプニングが語られている。コメントは 1 枚の写真ごとに付けるのではなく、同じ場面に関連する数枚の写真ごとにまとめて付けている。また #5 と同じように、入場券やプリクラ、シールなどを活用している。

以上のように、通常の写真は、切ったり貼ったりする加工がしやすく、またコメントを書き加えやすいために、語りと写真とを組み合わせたパッケージを作りやすい。写真は、コメントによって加えられる語りと合成されてはじめて、ストーリー性のある思い出としてまとめられる。こうしたパッケージは、単体の写真と違い、自分で見ても、また友人に見せても楽しいものになっているようである。

4. 電子ミニアルバム

4.1 なぜ電子ミニアルバムが必要なのか

インタビューから、写真はわたしたちの思い出と深くつながっており、手軽に撮影でき保存できる媒体であることがわかった。また、写真は単に個人や家庭で保管しておくだけのものではなく、ミニアルバムなどに入れて常時持ち歩いたり、機会があれば気軽に人に見せられる形にしておくことで、コミュニケーションを活性化する機能を持つことが明らかになった。そして従来の写真の利便性は、加工が容易で、テキストなどとの組み合わせもしやすく、手帳やノートの形でパッケージに作りやすい点にあると考えられることを示した。

一方で、デジタルカメラやビデオが普及してきているにも関わらず、電子的な画像データの編集や保存は、誰でも手軽にできるものではない。また特に編集や整理をせずに保存されてしまうと、取り出して再生するのに手間がかかるために、二度と見ないものになってしまうことも多い。

ただし電子的な画像には、通常の写真とは異なる利点もある。例えば大量でもコンパクトに保存できる点や、長期間保存しても画像が劣化しにくい点や、加工のやり直しや、加工したもののコピーが容易にできる点などである。もし、電子的な画像の利点を生かす形で、通常の写真で見られたのと同様の、コンパクトでストーリー性のあるパッケージを気軽に編集し、保存し、携帯し、簡単に表示できれば、自分自身で繰り返し見たり、友人や家族に見せたりして、コミュニケーションの道具として

活用することができるようになるのではないか。そうした立場から、われわれは、電子的な画像を、ストーリーと結びつけたパッケージの形に手軽に編集し、そのパッケージをファイルとして常時携帯でき、簡単に表示できるような装置を、ポータブルパーソナルメモリー (Portable Personal Memory) と名付けて、その基本概念を提案する。

4.2 基本仕様と実装プラン

ポータブルパーソナルメモリーは、電子的な画像 (静止画像) に、コメントと装飾を加えて編集し、パッケージ化して保存し、表示するための装置である。編集と表示の装置を一体化できることが理想だが、現段階ではまず表示装置を中心に検討を行っている。

重要なのは、持ち歩けるサイズであること、表示の操作がしやすいことにある。また、データをパッケージとして保存するために、以下のような構成を想定している。

- ・ 画像層 写真 6 枚から 10 枚程度を、形、角度、配置を自由に設定できるレイヤー
- ・ コメント層 画像層の配置に対応して、コメントや装飾を自由に配置できるレイヤー
- ・ 画像層を上限 10 単位程度まで 1 イベントとしてパッケージ化する
- ・ 表示する際は、画像層とコメント層を重ねる (コメント層は複数作成して、組み合わせを選ぶ可能性も考慮する)

最終的に実現するときには、Palm または Pocket PC のような小型のパソコンあるいは専用の携帯機器を想定しているが、現段階では、Windows パソコン上でのモデル化を行い、「思い出のパッケージ化」がしやすいものとなっているかどうかの検討を進めている。

5. おわりに

個人の思い出は、写真だけでなく日記などの文書、服や靴などの具体的な事物、住居などの場所と結びついた記憶など多様な形で存在する。また、単に物を保存すれば良いのではなく、それに伴う経験や語りを結びつけることも必要である。これらは人がごく普通に行っているものであるにもかかわらず、コンピュータで行うのは難しい領域である。私たちの思い出を保存し、意味あるものとし、さらに、必要に応じて自分で楽しめ、他者とのコミュニケーションを豊かにするためには、思い出コミュニケーションをデータベース、コミュニケーションツールの側面から支援するための包括的な情報科学からのアプローチが必要とされるだろう。ポータブルパーソナルメモリーは、この「思い出工学」を具体化する試みのひとつである。

参考文献

- [1] 小林: 物語られる「人生」, 学陽書房, (1997)
- [2] マクナミー他: ナラティブ・セラピー, 金剛出版, (1997).